

A study on the "Otogibouko" in the Asian Chinese character cultural sphere: focusing on the adaptation of the 'Yujyo Miyagino'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/25366">http://hdl.handle.net/2297/25366</a>

# アジア漢字文化圏の中の『伽婢子』

——「遊女宮木野」の翻案の特質を中心に——

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

金 永 昊

A study on the “*Otogibouko*” in the Asian Chinese character cultural sphere  
—focusing on the adaptation of the ‘*Yujyo Miyagino*’—

KIM Young-ho

## Abstract

The purpose of this research is to clarify the characteristic of Japanese novel ‘*Yujyo Miyagino*’, an adaptation of Chinese ‘*Aikeiden*’, comparing with the other two its adaptations, Korean ‘*Riseikisyouden*’ and Vietnamese ‘*Nanshyojyosiroku*’.

Although it has been said that *Miyagino*’s attributes were borrowed entirely from ‘*Aikeiden*’, this research has shown that it reflects a view of *yujyo*’s fidelity in Edo period.

As for the story of transmigration, only ‘*Yujyo Miyagino*’ adapted the motif faithfully. This is because “*Otogibouko*” itself has the notion. Therefore, only Ryoi sympathized with the motif of the original story.

It goes without saying the “*Otogibouko*” occupies an important position in Japanese literature. Furthermore, it is the finest material for viewing Japanese literature in the perspective of Asian Chinese Character Culture Area.

## Key Words

Otogibouko, Yujyo Miyagino, Aikeiden, Riseikisyouden, Nanshyojyosiroku

## 1. はじめに

浅井了意の『伽婢子』（寛文6年、1666）は仮名草子の代表作としてよく知られ、日本文学史においても翻案小説の嚆矢として、江戸時代怪異小説の源流となる小説として高く評価されている。この作品が、中国明代の文言小説『剪灯新話』や『剪灯余話』、朝鮮の金時習による『金鰲新話』、『五朝小説』などからその題材を採り、人物や場所は日本のものとして改変し、時代は主に戦国動乱期に変え、日本で起きた物語として再創造するという巧みな翻案ぶりを見せている作品であることは

既に多くの先学によって指摘されているところである”。

『伽婢子』に描かれた怪談が高く評価されている理由は、単純に原話を日本の物語に置き換えたのではなく、怪談を通して社会の矛盾を暴露し、主人公の理想と現実の葛藤を描く中で人間や世界に対する洞察を提示するという画期的な進展を遂げている点にある。

一方、この『剪灯新話』が日本だけでなく、朝鮮やベトナムにも伝えられ、朝鮮では『金鰲新話』として、ベトナムでは阮嶼により『伝奇漫録』として翻案されていることも参考文献欄に挙げた通

りよく知られているところである。中国本土では禁止されていた『剪灯新話』が、アジア各国に伝えられ、それぞれの風土を反映した翻案作品が生まれ、それらが各国の文学史において大きな意義を有する作品として評価されているのは大変興味深いことである。

本稿で取り上げる『伽婢子』巻六の三「遊女宮木野」は、戦乱によって引き裂かれた夫婦の悲話を描いた物語で、上田秋成による『雨月物語』の「浅茅が宿」の出典としても挙げられている佳篇である。この「遊女宮木野」については、主に「浅茅が宿」や「春雨物語」「宮木が塚」を理解するための補助的な手段として言及されており、原話の「愛卿伝」との比較については坂巻甲太氏が『浅井了意怪異小説の研究』（新典社、1990、p.237）で、中国の怪異譚に拠りながら、その上に第二の典拠（歴史上の事実）を用意するなど、時代・場所・人物その他細部にわたるまで周到に計算し設定し、みごとに怪異を日本化した。と、「遊女宮木野」の自国化の独創性について指

摘しているのがほぼ唯一である。

「遊女宮木野」が『伽婢子』を代表する高い文学性を備えた作品として評価されているのに対して、ほとんど研究が行われて来なかったのは、「遊女宮木野」自体が「愛卿伝」をあまりにも忠実に翻案したため、坂巻甲太氏の指摘を超えて、「遊女宮木野」の新たな特質を見出すことが難しかったためであろう。

本稿では、『金鰲新話』『李生窺牆伝』の後半部、『伝奇漫録』『南昌女子録』が「遊女宮木野」と同じく、『剪灯新話』『愛卿伝』の翻案作であることに着眼し、各国での翻案の様相を比較検討していくなかで、改めて浮かび上がってくる「遊女宮木野」の特質を明らかにしていきたいと考えている。それらに見られる貞節観の異同、転生と死生観の問題を比較検討することによって、「愛卿伝」と比較するだけでは気付かれなかった「遊女宮木野」の特色を浮き彫りにし、それを手がかりにしてアジア漢字文化圏の中における『伽婢子』の性格の一端を明らかにしたいと考えている。

## 2. 各話の梗概

「愛卿伝」	「遊女宮木野」	「李生窺牆伝」	「南昌女子録」
愛卿は才色兼備の有名な遊女であった。	宮木野は才色兼備のかくれなき遊女であった。	●『剪灯新話』『連芳楼記』の翻案	武設は貞淑で顔貌もすぐれた女性であった。
趙生は愛卿を妻として迎える。愛卿は婦道をよく守る。	藤井清六は宮木野を妻として迎える。宮木野は婦道をよく守る。	李生は崔氏が住んでいる家の壁の中を窺う。二人は漢詩を交わし、お互いに心を許す。李生は崔氏のもとへ夜這いし、二人は愛情を極める。	張生は武設を妻として迎える。張生は疑い深い人であったが、武設は婦道をよく守る。
親戚の推薦で官職に就くことになり、趙生は大都へ赴く。	京都にいる叔父の危篤が伝えられ、清六は京都へ赴く。	●『剪灯新話』『翠々伝』の翻案	戦乱が起こり、張生は戦場に行くことになる。
親戚は病で既に官職を辞めていた。趙生が大都で逗留しているうちに、母は愛卿の看病にもかかわらず亡くなる。	清六の叔父が死ぬ。戦乱が起こり、道が閉ざされる。母は愛卿の看病にもかかわらず亡くなる。	李生の両親は結婚を反対するが、崔氏の説得によって二人は結婚する。結婚の費用は崔氏側が負担する。	武設は子供を生む。また、母は武設の看病にもかかわらず亡くなる。
張士誠の乱が起こる。愛卿は貞節を守り自殺する。	武田信玄が駿河を攻撃する。宮木野は貞節を守り自殺する。	紅巾賊の乱が起こる。崔氏は貞節を守り殺される。	張生は故郷に戻って来て、武設の貞操を疑う。武設は河に身を投げ、自分の潔白を証明する。

「愛卿伝」	「遊女宮木野」	「李生窺牆伝」	「南昌女子録」
戦争が終わり、趙生は故郷に戻って来る。昔の召使いから今までの事を聞く。	戦争が終わり、清六は故郷に戻って来る。昔の召使いから今までの事を聞く。	戦争が終わり、李生は故郷に戻って来る。	隣人の潘郎が海で台風に遭って死ぬ。潘郎は竜宮で武設に会い、蘇ってから張生に竜宮で武設に会ったことを話す。
趙生に愛卿の亡霊が訪れ、今までの事情を語る。愛卿は無錫県の宋氏家に生まれ変わることを告げ、翌朝別れを告げる。	清六に宮木野の亡霊が訪れ、今までの事情を語る。宮木野は鎌倉の富裕な家に生まれ変わることを告げ、そのまま消え去る。	李生に崔氏の亡霊が訪れ、今までの事情を語る。二人は数年間一緒に住み、幽霊は別れを告げる。	武設が身を投げた河で、長生が祭祀を行うと武設の幽霊が現れ、永遠の別れを告げる。
趙生は宋家を訪れ、両家は親族となる。	清六は鎌倉の家を訪れ、両家は一族になる約束をする。	李生は崔氏を葬り、病気のため亡くなる。	評語。男の疑い深いことに対する諫め。

### 3. 遊女と貞節

かつて木越治氏は「恋と死—西鶴作品の「語り」を通して—」（『国文学解釈と鑑賞』第73巻3号、至文堂、2008年3月、p.151）で、浅井了意の創作技法について、「不要と思えば省略してしまうようなことをいくらもして」いるとし、また、「原話の設定をそのまま生かしたものとみなされている」部分にも「了意にとっては、単なる翻案を超えた積極的な意味を持っていたはずである」と指摘された。これまでは原話と異なる部分から了意の意図を認めようとしたのに対して、原話と同じ設定のところにも場合によっては、了意の意図を読み取るべきではないかという見解は、「遊女宮木野」の文学的特質を理解するうえで傾聴に値する説であり、この指摘を念頭に置きつつ、以下比較しながら読み進めて行くことにしよう。

「愛卿伝」の愛卿は「惟知倚門而献笑」で、「令色巧言、迎新送旧、東家食而西家宿、久習遺風。張郎婦而李郎妻、本無定性」の遊女であった。日本の遊女にあたる存在を中国では妓女、朝鮮では妓生、ベトナムでは倡流と呼び、名称はそれぞれ違うが、詩・書・画・舞・歌などの芸術はもちろん、知識の最先端を生きる教養人でありながら、男の客たちに性を提供することによって生きている社会の組織からは外れた女性であったことは共通している。

遊女は性を提供する存在であるため、もともと貞節を守る資格を与えられるはずがない。にもかかわらず、「妾之死也、冥司以妾貞烈、即令往無錫宋家托為男子」とあるように、愛卿は「貞烈」の功が認められ転生する。もともと遊女であった愛卿が、人妻になっていかに貞節があったとしても、かつて遊女であった時代のことは不問に付されてよいのであろうか。

この問題と関連して、合山究氏は『明清時代の女性と文学』（汲古書院、2006）で明末の宋懋澄による『負情儂伝』や清代中後期の紀慶曾による『貞妓王金芝伝』などの話が妓女の節烈を描いていることを挙げて、

妓女を「貞節」によって評価しようとする傾向が以前よりも強まり、従来なら貞節に当たるかどうか分からないようなものまで、「貞烈」に入れて称賛することが行われた。

と指摘された。明清時代にこのような傾向が現れた原因として、氏は

節烈概念の変容と拡散は避けられないものとなり、節婦烈女の基本概念からやはずれたものまで、節烈によって顕彰しようとする傾向があらわれ、節婦烈女の変種が生まれた。とし、明清時代には節烈概念の変容と拡散によって、遊女に対しても節烈を積極的に認めようとする風潮が生まれたと指摘している。もちろん、明代の277年間、清の297年にわたる期間に存在した

様々な形の女性の貞節に関する認識を一括りにするのは問題があるものの、氏の指摘は「愛卿伝」を解釈するにおいて役に立つ重要な説であると言える。したがって、このような背景を考慮すると、愛卿が遊女であったとはいえども、「貞烈」を守ったことによって尊ばれることは、「愛卿伝」が創作された当時の価値観からみて何も不思議ではなかったのである。

それに対して、「李生窺牆伝」と「南昌女子録」の場合、原話の女主人公が遊女であった部分が削除されている。やはり、儒教的道徳観が根強く存在していた両国にとっては当然の結果であろうが、このような改変の様相を更に深く理解するために、朝鮮とベトナムにおける遊女に対する認識について検討してみる必要がある。

朝鮮の遊郭は国が直接管理し、官妓として妓生たちを養成した。また、妓生は賤民の身分であり、その身分は世襲され、一般の市民になるのは不可能であった。結婚も禁止され、普通の家庭を持つことも出来なかったのである<sup>2)</sup>。また、儒教的な道徳観念が強かった朝鮮時代には、実際には多くの官吏たちが遊女と交わったものの、建前として妓生と交わることは淫蕩なことであり、戒められるべきであった。例えば、『金鰲新話』の成立と近い記録として、『朝鮮王朝実録』の太宗9年(1409)5月27日の条を見ると、

金城県令閔麟生罷。麟生率江陵官妓小梅香赴任。觀察使尹思修論罷之。

と、金城県の閔麟生が江陵の官妓小梅香を連れて赴任したために、觀察使尹思修の上訴によって罷免されたことが載り、世宗20年(1438)11月23日の条には、

本国大小官吏、以妓為妾。不唯淫穢無節。因此夫婦反目、父子兄弟乖離。

と、大小官吏が妓生をもって妾にすることを慨嘆し、それは「淫穢」「無節」なことであり、夫婦が反目し、家庭が破綻する原因になると批判している。

このような朝鮮時代の価値観によって、妓生はもともと貞節の功によって尊ばれる資格もなかつ

た。例えば柳夢寅(1559~1623)の野談集『於于野譚』(1621)には論介という名の妓生について  
彼官妓淫娼也。不可以貞烈称。而視死如歸、不汚於賊。

と言っている。文禄の役の時、日本軍が晋州城を落として酒宴を開いていた時、論介は敵将を抱えて南江に飛び込んだことで有名な妓生である。『於于野譚』は敵将と一緒に自殺した論介の見事な死に方を褒めてはいるものの、彼女の素性がもともと遊女であることから、最初から「貞烈」を認めることが出来ないという厳しい態度を取っている。

遊女に対する認識はベトナムにおいても朝鮮と同じく、『伝奇漫録』巻二の二「陶氏業冤記」をみると、女主人公寒灘は「晝音律、通文字」の「名妓」であり、その漢詩は帝も賞賛するほど優れていた。後に寒灘は比丘尼になるが、比丘尼になっても遊女としての本性を隠せず信者たちと契り、死後生まれ変わっては妖怪になるのである。また、巻三の四「翠綃伝」の評語では遊女を妻とした余潤之について、

不正之女、中士羞以為婦。翠綃出自倡流、本非令徳。〈中略〉顧乃輕於去就、忍辱投入。編虎頭、摩虎鬚、幾不免於虎口。若潤之者、誠可謂愚矣。

というふうに、「不正」な遊女を妻とした余潤之の行為について、「去就」を軽率にした愚か者であると厳しく非難している。「陶氏業冤記」と「翠綃伝」の例からも分かるように、ベトナムでも遊女は汚れた女性としての非難の対象であり、貞節が認められる資格はもともとなかった存在であった。原話で、遊女であった女主人公が貞節を守ったことによって尊ばれることは、当時の朝鮮とベトナムの価値観としては矛盾する話であり、貞節譚を描くにあたり、遊女としての属性を一般の女性に改変するのは当然のことだったのである。

それに対して、「遊女宮木野」の宮木野は駿河の有名な遊女として描かれ、愛卿の人物像をそのまま受け継いでいる。「遊女宮木野」における了意の人物設定の方法は、これまでは単純に原話の丸取りとして片付けられて来たため、より発展的

な形での解釈は生まれて来なかった。しかし、本稿では遊女に対する当時の認識と関連付けて考えてみることによって、宮木野像に対する新たな読みの可能性を示してみたい。

遊女であった宮木野が貞節を守ったことによって尊ばれるのは、中国の明清時代のように「節婦概念の変容と拡散」といった貞節観の変化があったからではない。日本の遊女は朝鮮の妓生とは違い、身分的には賤民でもなく、世襲もされず、結婚が不可能であったわけでもなかった。そして、ベトナムのように遊女と結婚した男性が非難されることもなかった。江戸時代に女性が遊女になった最も大きな理由は生活苦から抜け出すためであり、貧しい生活から脱却するために夫や両親によって売られると、一般の女性であっても遊女にならざるを得なかった。また、年季が明けたり病気になるったり身請けされたりするなど遊女の生活を辞めると、いくらでも一般の女性に戻ることが出来た。

藤井が母これを聞て、「府中には人にもさがらぬ家督なれば、いかならん名もある人のむすめをもむかへてわが新婦とも見ばやとこそおもひつるに、遊女を妻とせむはこれ本意なけれども、よしやわが子のみるべきめんだうを、今はいかにいふとも詮なし。はやくよびいれよ」とて、家にむかへとりてみるに、みめかたちうつくしきのみならず、心ざまゆうにやさしかりければ、母かぎりなくよろこび、「たとひ大名高家のむすめなり共、生れつき人がましからずは何にかせむ。この女はいかなる人の末にも侍べれ、たぐひなき女の道しれる人ぞや。わが子のまどひめでけるこそことほりなれ」とて、世にいとおしみかしづきけり。

この引用文は、清六の母が宮木野を迎えた時に語った言葉であるが、原話にはなく「遊女宮木野」で新たに追加された部分である。ここで母が問題にしているのは、清六が遊女を妻としようとしていることである。この引用文を見ると、母は遊女の身分が賤しいとか貞節を失っているとかを問題

にしていない。引用文にも「遊女」の反対の意味として「名もある人のむすめ」或いは「大名高家のむすめ」の言葉が使われていることから分かるように、母が問題にしているのは宮木野の貧しい身分であったのである。

つまり、当時のアジア漢字文化圏又は現代の感覚とは違って、遊女という職業自体は江戸時代には非難されることもなく、また、結婚する前に女性の職業が遊女であったことは何も問題にならず、自分の経歴を隠す必要もなかった。このような背景から「遊女宮木野」を読み直してみると、宮木野は物語の中で、結婚する前に遊女であったことは何も問題にならず、重要なのは結婚した後に夫に対して貞節を守ったかどうかである。宮木野の自殺後、敵兵さえも「その貞節をあはれみ」「その貞節を感じ」という原話にはない表現が追加されることによって宮木野の貞節が称えられ、また、「貞節孝行の徳」によって転生する資格を与えられたのは、このような江戸時代の遊女に対する認識と貞節観が前提になっていたからである。

#### 4. 「愛卿伝」の転生譚と救い

「愛卿伝」の作品解釈において、最も問題になるところは、

妾之死也、冥司以妾貞烈。即令往無錫宋家、托為男子。

と記されているように、愛卿が「貞烈」の功によって男子として転生する後日談をどう解釈し、位置付ければ良いかであり、各翻案作ではいかなる形で原話の転生譚を利用しているかを検討することであろう。

この問題と関連して、澤田瑞穂氏は『中国の伝承と説話』（研文出版、1988、p.19）で、「剪灯余話」巻二の一「連理樹記」について、次のように述べている。

至純の夫婦愛もしくは未遂の悲恋に殉じた男女の墓に連理樹が生じ、その樹に鴛鴦が棲むというのは、いわゆる植物化生や動物由来の民間伝承に根を持つばかりでなく、またそれ

を語り伝える無名の人々が、その悲運の男女に捧げるせめてもの鎮魂の供物でもあった。そうした眼前の樹木や動物に対して、その化生を証言し、しみじみと追懐することこそ、死せるものの遺恨を慰める途であると信じたがために、民間伝承の殉情悲恋物語には、その結末には決まってこのモチーフが持ち出され、少しでも受難の惨酷さを緩和し美化しようとする。いわゆる吐瀉の後の一服であり、人生の悲運に対する補償でもある。それは説話伝承の文学的技巧というだけではなく、実は冤魂鎮定の呪術としての説話の民俗的機能をも無意識のうちに継承しているのである。

このような澤田氏の見解は、「愛卿伝」を理解するうえで傾聴に値する重要な説である。つまり、「愛卿伝」では「死せるものの遺恨を慰める」と同時に、愛卿が経験した悲劇的な人生に対して、「少しでも受難の惨酷さを緩和し美化」するために、男子として転生する形を取ったのである。

しかし、本稿で問題にしたいところは、愛卿に「人生の悲運に対する補償」が必要であるならば、他にも色々な形があり得たはずである。それをあえて転生という形にし、しかも女子として転生して趙生と愛を持続させるのではなく、男子として転生したのはなぜかで、ここで私は、物語の展開上、必ず男子として転生しなければならない必然的な理由があったのではないかと考えている。その理由として姑が死ぬ直前に愛卿に語った遺言を一部分引用してみよう。

但願吾子早帰、①新婦異日有子有孫、皆如新婦之孝敬。②蒼天有知、必不相負。

上の引用文を見ると、姑の願いは息子が一日でも早く帰って来て、①から分かるように愛卿が子や孫をもうけ、その子孫が愛卿に孝行を尽すことであった。また、②で「蒼天」が愛卿のことを知っているのであれば、この願いは必ず叶えられると言っている。

愛卿が歌った『沁園春』に「一別三年、一日三秋。君何不帰」とあるように、二人が別れた期間は三年であり、二人の間に子供はいなかったはず

である。そして、愛卿は子孫がないまま死んでしまった。したがって、姑が①で遺言として残した言葉が②の言葉通りに叶えられるためには、愛卿が転生するしか方法がなかったのである。つまり、愛卿の転生は姑が遺言を残した時点から伏線として既に決まっていたのではないだろうか。

次は、愛卿が男子として転生したことだが、この問題を解くためには『剪灯新話』から見られる幽霊出現の理由と別れについて検討してみる必要がある。

#### ○卷一の四「金鳳釵記」

然与崔家郎君縁分未断。今之来、此意亦無他。特欲以愛妹慶娘統其婚爾。

→生前の因縁が終っていないため、妹を通して絶たれた因縁を全うする。

#### ○卷二の三「膝穆醉遊聚景園記」

妾本幽陰之質。久踐陽明之世、甚非所宜。特以与君有夙世之縁、故冒犯条律以相従耳。今而縁尽。自当奉辞。

→宿世の因縁があったので、「条律」を破って現れたが、今は因縁が尽きたため、別れなければならない。

#### ○卷四の五「緑衣人伝」

兎実非今世人。亦非有禍於君者。蓋冥数当然。夙縁未尽爾。

→私（幽霊）は人間に禍をなす存在ではない。その理由は、宿世の因縁が尽きていないからであり、我々が交わるのは「冥数」である。

これらの例から分かるように、幽霊が出現する理由は前世から絶たれた因縁を全うするためであり、その因縁が尽きると別れなければならない。それが運命であり、また『剪灯新話』に内在する論理である。したがって、この時に登場する幽霊は優しい幽霊ばかりである。卷二の四「牡丹灯記」で幽霊との交わりが禁忌として語られているのは、喬生と麗卿の愛が前世に絶たれた因縁を全うするためではなく、鉄冠道人が下した判決文から分かるように、「貪婬」であったからである<sup>3)</sup>。

それでは「愛卿伝」の場合を見てみよう。

妾以与君情缘之重，必欲俟君一見，以叙懷抱。  
故遲之歲月爾。今既見君矣。明日即往降生也。

上の引用文から分かるように、愛卿が趙生の前に現れた理由は「情缘」が「重」かったからであり、趙生に「一見」し、「懷抱」を述べ、一夜を共にすることによって二人の因縁は完結した。「今既見君矣。明日即往降生也。」と言う愛卿の言葉は二人の因縁がこれで終わりであることを意味している。そして、『剪灯新話』の論理からすると、男女としての二人の「情缘」は完結したため、愛卿はこれ以上幽霊として趙生の前に現れる必要がなくなってしまったのであり、女子として生まれて愛を持続させる必要もなくなってしまったのである。

愛卿が転生することによって、姑の遺言が叶えられると同時に愛卿の魂は救われ、また、愛卿が男子として転生し、宋家と趙生が親族になることによって、趙生と愛卿の繋がりは維持されたのであろう。

## 5. 転生譚と死生観

それでは、各翻案作品では「愛卿伝」の転生譚についてどう考えているのであろうか。まず、「李生窺牆伝」と「南昌女子録」では原話の転生譚を削除しているのが大きな違いである。「李生窺牆伝」の場合、二人が別れた後、李生は「生拾骨，附葬于親墓傍」と記されているように祭祀を行うことによって崔氏の霊を鎮魂する。原話の転生の代わりに、死者の霊を祭祀を通して鎮魂することによって、受難の人生を生きた崔氏の霊を慰めるのは、言うまでもなく古来から朝鮮で祭祀を通して死者の冥福を祈るという死生観が反映されたものであろう。

「南昌女子録」は貞節の尊さを称えながら、評語では男性のための教訓譚として読まれるように方向を転換している。それでは「南昌女子録」の評語を一部分引用してみよう。

疑似之嫌，難明而易惑也。③故投杼之疑，雖大賢之母且不免。④窃鉄之惑，雖隣人之子其

奚解。⑤蕙苴之車，光武頓疑老将。⑥縛殺之語，曹公至負恩人。氏設之事，亦類是也。〈中略〉⑦為丈夫者，毋使佳人至是哉。

③は『戦国策』「秦策」の「曾參殺人」の故事、④は『列子』「説符篇」の「疑心生暗鬼」の故事、⑤は『後漢書』「馬援伝」の故事、⑥は『三国志』で呂伯奢を殺した曹操の故事であり、いずれも疑い深いことに関する中国の逸話である。そしてこれらの故事をもとに最後に下された結論は、⑦から分かるように「丈夫」たる者は「佳人」にこのような辛い経験をさせてはいけないということである。

「南昌女子録」は武設の貞節談を描くことによって、実は武設を死に至らしめた張生の疑い深い天性を批判しており、これはこの物語が男性の「修身」のための教訓譚として読まれることを意図したものである。拙稿<sup>9)</sup>でもすでに指摘した通り、「怪力乱神」を語ってはいけないということを犯しながらも、当時のベトナムの知識人が怪談を題材にしている『伝奇漫録』について「然有警戒者，有規箴者。其關於世教，豈小補云（何善漢による序文）」と、教訓譚としての意義を高く評価したのは、作者が直接物語の中で顔を出し、その教訓譚としての意図をストレートに伝えているからである。物語の冒頭部分で張生の人物像が「然生性自多疑」と、疑い深い人として設定されて伏線の役割をしたことや、張生が戦争から戻って来て武設の貞操を疑う内容として改変された理由は、このように疑い深いことを諷め、男性の修身を勧めるのを主題とした物語に改変するためであったのである。

「南昌女子録」と同じく「愛卿伝」の翻案による『伝奇漫録』巻一の二「快州義婦伝」の評語にも「使之含冤泯泯。仲達亦豚犬兒哉。欲齊其家者，当躬率以正」と、仲達を「豚犬」のような人物であると批判し、「其家」を「齊」えるためには、自分の「躬」を「正」しくすべきであると述べているのをみると、『伝奇漫録』の作者阮嶼は最初から「愛卿伝」を男子の修身の物語として翻案しようとした意図があったのであろう。

これまで検討したように、朝鮮とベトナムの翻案作には原話を改変したうえで、作者の意図を反映した物語として新たに作り直されている。それに対して、「遊女宮木野」の場合をみると、

和君かならず子をうみ給はん。われは孫をも見ずして死なむ。その子と和君に孝行なる事、又今和君の我につかへてこまやかなるがごとくなるべし。あなかしこ。天道ものしる事あらば此ことばたがふべからず。

と言った姑の遺言と、

さりながら貞節孝行の徳により、天帝地府われを愛じて男子となし、今鎌倉の切どをしに富祐の家あり。高座の某と名づく。

と描かれている宮木野の転生譚は、原話をほぼ忠実に翻案したものである。これは原話を忠実に翻案するという了意の方針が反映されたものとして考えるのも一理あるが、本稿ではそれに加えて『伽婢子』自体にも転生の論理が存在することを指摘し、「遊女宮木野」の独自性を探ることしよう。

「遊女宮木野」で「永禄十一年武田信玄駿州に発向して府の城にとりかけ」と記されているように、武田信玄が駿府を攻撃したのは永禄11年(1568)年である。『甲陽軍鑑』に即して言えば、武田信玄が駿河国を攻撃したのは永禄11年12月6日で、「次日十三日には、駿府の城を焼払」ったと記されている。したがって、「遊女宮木野」で武田信玄の兵士が「府の城にとりかけ、民屋に火をはなちて焼たて」、宮木野が貞節を守るために自殺をしたのは、永禄11年12月13日か、あるいはそれとそれほど遠くない時期である。それでは清六は幽霊になった宮木野と何年ぶりに再会できたのであろうか。

夫婦が別れてから戦乱が起り、「清六も心のまゝに道をも過得ず、旅やより旅やにうつり、こゝかしこせしほどに、一年あまりになりけり」とあり、それから約半年後、母は亡くなり、49日の弔いを営む。ここまでは時間の経過がはっきりしている。しかし、それ以降「いくほどなく駿府は武田の手に入りてしづかになり、道ひらけて通路たやすく、海道の諸大将も和ぼく」と記されているが、

この「いくほどなく」とはどれだけの時間を指すかはっきり分らない。そして、「海道の諸大名」が「和ぼく」したことも具体的に何を指すかはっきりと示されていないが、恐らく了意は元亀2年(1571)12月に武田信玄と北条氏政の間で行われた甲相同盟のことを念頭に置いたのではないかと思われる。ならば、宮木野が死んでからちょうど3年目で二人が再会し、宮木野が転生したことになる。

もちろん、「遊女宮木野」で二人が再会し、転生するために要した3年という時間は、原話で「一別三年」とあるように、原話の設定を受け継いだものであろう。しかし、本稿では『伽婢子』自体にも転生の論理が含まれていることを指摘してみたいと思う。例えば、『伽婢子』巻七の四「中有魂形化契」には死者にとって3年という時間が持つ意味について次のように述べられている。

みづからは飯尾新七がむすめ也。年十七にして病によりてむなしくなり、明日はすでに第三年にあたれり。死して中有にとまらる事、三年をかぎりとする。三年過ぬれば、その業因にまかせて、いづかたになりとも生を引てもむく。

『書言字考節用集』では「中有」について「冥途ノ中間ヲ曰フ」と説明されている。「中有魂形化契」によると、「中有」にいる期間、つまり幽霊として存在する期間を3年を限りとし、3年が過ぎれば、その「業因」によって「いづかたになりとも生を引てもむく」そうである。宮木野が「貞節孝行」の「業因」によって、鎌倉の富裕の家に「生を引てもむく」いて転生し、その期間を歴史的史実に基づいて計算するとちょうど3年になるのは、原話の設定を丸取りしたというよりも、「中有魂形化契」で提示されたような死生観が反映されたからであると考えるのがより妥当ではないかと思われる。

## 6. おわりに

『伽婢子』巻六の三「遊女宮木野」は『伽婢子』

を代表する佳篇であるにもかかわらず、坂巻甲太氏の指摘以来、まとまった研究はほとんど行われて来なかった。その理由は、「遊女宮木野」自体が「愛卿伝」をあまりにも忠実に翻案したため、坂巻甲太氏の指摘を超えて、「遊女宮木野」の新たな特質を見出すことが難しかったためであろう。

本稿では「遊女宮木野」以外にも、朝鮮の『金鰲新話』『李生窺牆伝』の後半、ベトナムの『伝奇漫録』『南昌女子録』も「愛卿伝」の翻案作であることに着眼し、貞節観の異同、及び転生と死生観の問題を中心に比較検討し、その中から新たに見えてくる「遊女宮木野」の翻案の特質について考察した。考察にあたり前提となったのは、これまでは原話と異なる部分だけが「遊女宮木野」の特質であると考えられてきたのに対して、本稿では原話と同じ部分にも了意の意図が反映されているとしたことである。したがって、その意図とはいかなるものであったかをを中心に考察した。

まず、宮木野の遊女としての人物像の場合は、従来は単なる「愛卿伝」の丸取りとして片付けられてきたが、各国の遊女と貞節観を比較することによって、「遊女宮木野」には原話を忠実に翻案する中でも江戸時代の遊女に対する認識と貞節観が反映されていたことが分かった。

原話での転生は、悲劇的な人生を生きた愛卿に対する救いの役割をしており、姑が遺言を残した時点で既に予定されていた。また、女子ではなく男子として転生したのは、趙生と男女としての因縁が完結したからである。そのような原話の転生譚を「李生窺牆伝」と「南昌女子録」では削除したのに対して、「遊女宮木野」だけが忠実に翻案し、更には再会と転生の期間を原話と同じく3年としている。これは、『伽婢子』巻七の四「中有魂形化契」から分かるように、『伽婢子』自体にも転生の論理が存在していたからであり、だからこそ浅井了意だけが原話の転生譚に共感したのである。

日本文学史の中で『伽婢子』が占める重要性については改めて言う必要がないが、日本の文学をアジア漢字文化圏というより広い視野から眺めた

時、『伽婢子』はこのうえない非常に良い材料である。今後は、『剪灯新話』の他の翻案作にまで比較範囲を広げ、アジア漢字文化圏の中での『伽婢子』の意義をより正しく位置付けることを課題としたい。

#### 注

- 1) 代表的な論考を挙げると、宇佐美喜三八「伽婢子に於ける翻案について」(『国語と国文学』12巻3号、東京大学国語国文学会、1935年3月)、富士昭雄「『伽婢子』の方法」(『名古屋大学教養部紀要』10輯、名古屋大学教養部、1966)、江本裕「了意怪異談の素材と方法」(『近世文芸研究と評論』2号、早稲田大学文学部暉峻研究室編、1972)、坂巻甲太『浅井了意怪異小説の研究』(新典社、1990)、黄昭淵「『伽婢子』と叢書—『五朝小説』を中心に」(『近世文芸』67号、日本近世文学会、1998)、花田富二夫『仮名草子研究—説話とその周辺—』(新典社、2003)などがある。
- 2) 朝鮮の遊郭事情に関しては『特集・江戸文学と遊里』(『江戸文学』33号、ペリかん社、2005年11月)に収められている渡辺憲司「十七世紀前半東アジアの遊女への視点」と、岩谷めぐみ「朝鮮時代における妓生」に詳しい。
- 3) 麗卿は「灯前月下、逢五百年歡喜冤家」と供述しているのみで、前世に絶たれた因縁を全うするためとは述べていない。
- 4) 拙稿「『剪灯新話』の翻案とアジア漢字文化圏怪異小説の成立—地獄譚「令狐生冥夢録」の翻案を中心に—」(『二松』22集、二松学舎大学創立130周年記念若手研究者懸賞論文中国学部門佳作、2008年3月、p.283)

#### 参考文献

##### 1. 国内文献

- 川本邦衛『伝奇漫録刊本攷』(慶應義塾大学言語文化研究所、1988)
- 木越治「恋と死—西鶴作品の「語り」を通して—」(『国文学解釈と鑑賞』第73巻3号、至文堂、2008年3月)
- 合山究『明清時代の女性と文学』(汲古書院、2006)
- 坂巻甲太『浅井了意怪異小説の研究』(新典社研究叢書35、新典社、1990)
- 竹田晃・小塚由博・仙石知子校注『中国古典小説選8 剪灯新話』(明治書院、2008)
- 太刀川清「『伽婢子』の創作意図」(『長野県短期大学紀要』32号、1977)
- 花田富二夫『仮名草子研究—説話とその周辺—』(新典社、2003)
- 黄昭淵「『伽婢子』と叢書—『五朝小説』を中心に」

(『近世文芸』67号, 1998)

北条秀雄『改訂増補浅井了意』(笠間書院, 1972)

## 2. 国外文献(原文は韓国語及び中国語)

郭正植「ベトナムの伝文学に関する研究—『伝奇漫録』所載作品の寓意性を中心に—」(『韓国文学論叢』12巻, 1991)

朴逸勇「『金鰲新話』と『剪灯新話』に現れた愛情モチーフの形象化方式とその意味」(『民族文化研究』35号, 2001年)

朴泰尚『朝鮮朝愛情小説研究』(太学社, 1996)

朴熙秉「韓国・中国・ベトナム伝奇小説の美的特質比較—『金鰲新話』『剪灯新話』『伝奇漫録』を中心に—」(『ベトナムの奇異なる話』(石枕, 2000)所収)

安東溶「東アジア初期小説の性格」(『ペダルマル』28号, 2001)

李学周「東アジア伝奇小説の芸術的特性研究—『剪灯新話』『金鰲新話』『伽婢子』『伝奇漫録』を中心に—」(成均館大学大学院博士学位論文, 1999)

——「東アジア伝奇小説の淵源と伝播」(『古典散文教育の理論』(集文堂出版社, 2000)所収)

張介宗「韓・中・越伝奇小説の比較研究—『金鰲新話』『剪灯新話』『伝奇漫録』—」(成均館大学大学院博士学位論文, 1994)

全惠卿「韓・中・越伝奇小説の比較研究—『剪灯新話』『金鰲新話』『伝奇漫録』を中心に—」(崇実大学大学院博士学位論文, 1994)

鄭煥局「『金鰲新話』と『剪灯新話』の志向と具現化原理」(『古典文学研究』22輯, 2002)

趙東一『韓国文学と世界文学』(知識産業社, 1991)

——『世界文学の虚実』(知識産業社, 1996)

陳益源『剪灯新話与伝奇漫録之比較研究』(台湾学生書局, 1990)

陳慶浩・王三慶編『越南漢文小説叢刊 伝奇漫録』(台湾学生書局, 1987)

崔溶澈『金鰲新話の版本』(国学資料院, 2003)

韓栄煥「韓・中・日小説の比較研究—『剪灯新話』『金鰲新話』『伽婢子』を中心に—」(正音社, 1985)

## 〈付記〉

本稿は平成十九年度日本近世文学会春季大会における口頭発表に基づいて作成したものです。席上でご教示を賜りました染谷智幸先生, 和田恭幸先生, また発表前から御指摘くださった北陸古典研究会の諸先生方, 論文執筆に当たり大変貴重な助言を賜りました勝又基先生, 木越俊介先生に深く感謝申し上げます。